

---

# 謝罪の言葉を風にのせて

あーゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

謝罪の言葉を風にのせて

### 【Nコード】

N7840X

### 【作者名】

あーゆ

### 【あらすじ】

あたしの親友は幼なじみととても仲がいい。

それはもう夫婦なんじゃないかというくらい。

そんな2人が2週間前からギクシャク…どうすればいいのかしら。

## 2週間前の事件（前書き）

初の投稿です。

駄文ですが………お願いします。

## 2週間前の事件

あたしの親友は  
可愛くて優しく強くて  
なによりも自慢だ。

でも意地っ張りなのがたまにきず。  
そんなところも可愛いんだけどね。

そしてその親友の幼なじみってやつが  
顔もよくて頭もいい。  
サッカーも上手でいわゆる”モテ男”なわけで。

この2人…  
回りからみたら確実に相思相愛なのに意地の張り合いでまとまる気配がないのだなあコレが。

しかも最近、  
ギクシヤクしてて  
近寄る気配もない。

可愛いあたしの親友はだんだん元気をなくすし  
その幼なじみはだんだん不機嫌に…  
どうしてあげたらいいのやら。

これは二週間前に遡るんだけどお付き合い願えますか？

## 二週間前

「今日は天気もよくて最高に気持ちいいわね！！」

「ほんと！！お弁当、中庭か屋上に行こうか」

親友、毛利蘭は女のあたしですらドキツとする笑顔を向ける。

「蘭っ！！」

でた。あたしと蘭の仲を引き裂く男。工藤新一だ。

蘭は鞆の中の明らかに”男物”のお弁当箱をもち彼のもとへ歩み寄る。

「あたしたち、屋上か中庭に行くけど？」

「……ん。」

新一くんは短く返事をしお弁当を受け取った。

「あーらら。あたしお邪魔かしら？せっかくなら2人でなかよく屋上行けば？」

冷やかすと2人は真っ赤になりながら色々と言葉をなげかける。からかいがいのある2人だこと。

結局3人なかよく屋上でランチタイム。

中学生になって間もなく、新一くんのご両親は海外へと旅立ち一人息子は現在独り暮らし中。

成長期の栄養不足を心配した蘭はお弁当を毎日作ってあげていた。

「おいしそー：新一くん、卵焼き頂戴」

「い・や・だ」

「愛妻弁当は渡せないってか」

こんなやりとりが毎日。

蘭はそれを嬉しそうに眺める。

「蘭、今日は部活？」

「うん、大会近いし」

「残念、美味しいカフェ見つけたんだけどまた今度ね」

女同士で会話に花を咲かせていると、小説を手にした新一くんが一言。

「蘭、今夜ハンバーグ食いたい」

「じゃあ帰りにスーパー寄ろうね。サッカー部終わるの待ってるから」

はあ…：中2にしてこの会話…

夫婦以外のなにものでもないわね。

キンコーン

予礼がなかったので教室に戻り席についた。  
出席を先生がとり…

「工藤……ん？工藤はどうした？」

「え？」

さっき一緒に教室に戻ったのに。

クラス中の視線が蘭に集まる。

「悪いな、毛利。探してきてくれな」  
「あ……はい……」

少し頬を染めた蘭は教室を後にした。

しかしその後教室に戻ることはなく蘭はそのまま新一くと保健の先生に連れられて病院へと運ばれた。

それから二週間……新一くと蘭は口をきいていない。

新一くんが蘭を避けるようになった。

と、まあこんな感じ

二週間前のあれ。

新一くんを探しに行った蘭と新一くんの間で”なにか”があった。それがなんだったのかは誰も知らない。

ただハッキリしているのは

翌日蘭は足に包帯を巻いていたこと。あと額に擦り傷が少し。理由を聞いても蘭は答えない。

そして新一くんは明らかに蘭を避けてる。

蘭は新一くんに話しかけようとするもヤツは巧みにかわす。すごいのはあたしにすら捕まえられないこと!!

蘭のケガのことも、2人のギクシャクした関係もなににもわからない。

そして今に至る…。

「蘭っ!!らん!!」

「え…あつ。」

蘭が箸を落とす。

「大丈夫?あんだ最近ますます元気もないし顔色もよくないよ」

「う…うん。」

「新一くん、最近お昼は?カバンのなかにヤツの分、今日もあるんでしょ?」

二週間ずっと作り続けたのを知ってる。渡せないけどそれでも彼の健康を気遣って。

「そろそろ…話せない?」

蘭の目を覗きこみながらケガの理由を聞いてみるが蘭は頑固だ。

「ドジっちゃっただけ」

うーん…それにしても

日に日に新一くんは不機嫌オーラが増してる気がする。

蘭不足?



だったら話かければいいのに。

蘭も蘭で新一くと一緒にいたいのに

「新一が避けてるのにどうしてあたしが能天気の話かけられる？」  
なんて泣きそうになりながら言うんだもん。

これはなんとしても新一くんを問い詰めるっきゃない！！

放課後。

新一くんのカバンが教室にあるのを確認して彼の机にどっかりと腰をおろした。

待てども待てども

ヤツが現れる様子がない。

辺りも暗くなつたし帰ろうかと思いつと窓に目を向けると音楽室に  
明かりがついているのに気がついた。

新一くんのカバンを持って音楽室へと向かう。

「なんでここに居るのよ。音痴なアンタに似合わないわよ」

彼は棚に腰かけて楽譜をペラペラめくる。

「しかもアンタ、こっから教室見てたわね。あたしがいたから来な  
かったわけか」

返事もないし目も合わせない新一くんをシカトしながら続ける。

「アンタ、足をケガした蘭を送らなくていいの？」

「……お前がお迎え呼んで一緒に帰りゃいいだろ」

「そんなのとっくに提案したわよ！！断られたに決まってんでしょ  
！！」

「……蘭 どうしてる？」

あ。やっぱり心配してんだ。

「元気ないわよ。誰かさんは明らかに避けてるし。お弁当は毎日作  
ってんのに渡せないし。あの日何があつたのよ」

「……………」

「そんなに言いたくないの？なんで蘭を避けるのよ。好きなんです  
よ？つかつかしてると盗られるわよ」

ぴくりと新一くんは反応する。

「あの日、蘭がケガしたの俺のせいなんだよ。」

ゆっくり新一くんが楽譜を閉じて話はじめた。

## 2週間前

俺の憩いの場所はいくつかある。

屋上、視聴覚室横の木の上、図書館、そしてここ。

校庭のはしにある用具庫の屋根の上。

隣りにある木をつたって登るんだが

いい感じに木があるからなかなか他人の目につかずゆっくりしてられる。

父さんから送られてきた新刊。先生にはわりいが読まずにはいられない。

天気もいいし、蘭の弁当も食って心地いい時間が流れる。

校庭で体育の授業が行われている。あーやべ…眠くなってきた。

「……………ち」

「あ？」

「新——！！」

「蘭！？」

慌てて身を起こすと蘭がいた。ちょっと怒ってる。

「もー！！一緒に教室に入った人がなんでここにいんのよ！！」

「はは…よくわかったな、ここ」

蘭にはなにも隠せないらしい。

「しかしよく登ってこれたな」

「運動神経そこまで鈍くありません」

少し膨れてみせた蘭がとても可愛かった。が、スカートで木登りかよと少しかなしくもなった。

「とにかく！！授業行くわよ。迎えに来たんだから今度は逃がさないわよ」

「へいへい」

読書の時間がなくなったのは残念だが、ここで蘭との2人きりの時間も悪くなかった。なんて呑気なことを思っていた。

「懐かしいね、木登りなんて」

「昔はよくやったけどな。」

2人他愛ない会話をしながら降りようとしたとき袖口が木にひっかかった。

「もー、なにやってんのよ。破れちゃうでしょ」

「そんなところから手え伸ばすなよ。あぶねえぞ」

俺より少し上の枝から手を伸ばしひっかかった袖口を助けようとす  
る蘭を制したその時だった。

運悪く校庭で野球をやっていたクラスのボールが飛んできた。

「きゃっ！ー！ー！」

さすがに当たりはしなかったがボールが上の方の葉をかすめ何枚か落ちる。

飛んできたボールに蘭は驚き

バランスを崩した

助けようとした俺の右腕は袖口がひっかかかっていて一瞬遅れた。

その一瞬をどれだけ悔やんだか

指先が蘭の指先に触れたものの蘭はそのまま地面に落ちた。

「蘭!!!!!!!!!!」

体育教師が気付きこちらに来た。

なぜここにいるのかとまず怒鳴り始めたがそんなこと構ってられなかった。

蘭を抱え保健室に走る。

そのまま先生の車で病院へ。

とっさに受け身をとったらしく蘭は軽く脳震盪を起こしたのと左足を捻挫しただけでほっとした。

「ごめんね…結局授業…サボらせちゃった」

額や頬に傷をうけた蘭は照れたように笑った。

けど聞いてしまったんだ。顧問と医者と蘭の会話。

捻挫した蘭はしばらく部活に出られない。大会にも出られなくなっ  
てしまった。

悔しいはずだ。毎日遅くまで練習をしてたんだから。

俺があんなところに登らなければ。

俺が授業をさぼるから。

俺が何でも蘭に頼るから。

蘭はこんなに俺に色々してくれてるのに  
守ることすらできなかった。

悔しくて情けなくて

どんな顔をすればいいのか分からなかった。

「毛利さん、今お父さんが迎えに来るから」

「はい」

そんな会話を聞きながら俺はただ立ってるしかなかった。  
しばらくして

おっちゃんが病院へ到着し

もちろん俺はこっぴどく怒られた。蘭が一生懸命取り押さえてくれ  
たお陰で殴られることはなかったが

殴られたほうがマシだった。

「ごめんね。心配かけて。保健室に運んでくれてありがとうね」

蘭はにっこりと俺に微笑んだ。

守れなかったのに  
礼なんか言つなよ…

帰宅してなにもやる気になれずそのまま布団に潜り込んだ。

好きな女も守れない。それどころかケガをさせるなんて。

蘭に顔向けができなくて

俺は翌日いつもより30分早く家を出た。

「とまあ、こんなとこ」

窓の外を見つめながら新一くんは言った。

「…責任感じてんだ？でも事故よ、事故！！蘭はアンタのせいなんて微塵も考えてないわよ」

「わかってる」

「蘭はアンタを心配してるよ？優しい蘭だからきつと」新一が気に病むんじゃないか”って」

「それもわかってる…」

新一くんの気持ちもわかるけど  
蘭の側にしてほしい。

完全なる事故じゃない…そんなことで蘭が新一くんを怒るわけない。

「……よ」

「え？」

「なんであの時…手が届かなかつたんだよ…あと少しだったのに…」

「新一くん…」

「近くにいたのに助けられねえなんて情けねえよな。」

泣いているのかと思った。

新一くんはあの日からずっと自分を責めていた。

「……蘭には俺がここにいたって言うなよ」

そう言ってあたしからカバンを取り音楽室から出ていった。

「ばかね…」

責めて責めてそれでも自分が許せないんだ。

それで蘭にも近寄らない。

もしかしたら

蘭が責めてあげたほうが新一くんにとっては楽だったかもしれない。

でも優しい蘭はそんなことしない。



強がりではなく

本気で新一くんのせいではないと思ってるから。

新一くんは納得してないけど。

翌日。あっさりとあたしは新一くんの頼みを破り捨てた。

「放課後 音楽室にいたわよ。最近部活終わると行くみたいね」

「音楽室…考えもしなかった…」

新一くんが苦手な科目だし苦手な松本先生に会う確率が高いとこなんて

いると思わないいわよね。

あたしは教室で2人を待つことにした。

蘭は音楽室に行ってみるとカバンを持っていった。

新一くんは校庭でサッカーをしているがやはり元気もなくイライラオーラ。

あんなにつまらなそうにサッカーやるなんて…初めて見たわ。

夕焼けが綺麗に校舎を染める頃…

優しいピアノのメロディが聞こえてきた。

あ。蘭かな？

久しぶりに聞いた。

新一くんもきづいたみたい。  
先輩に一言一言かけて  
風のように走る。

音楽室へ行くのかな？

仲直りできるといいけどな。

教室に置き去りの新一くんのカバンを手にしてあたしも向かう。

ガラッ

勢いよく開けた音楽室の防音扉。

ピアノを弾いてた蘭は驚いてこちらを振り返る。

「びっくりしたあ…。気づくの早いね。」

「へ…？」

蘭はまたゆっくりとピアノを弾き出す。

「校庭にね、新一を見つけたから聞こえるかなーって弾いてみたの。  
へたくそだけど。」

「蘭…俺…」

「新一…あたしのこと嫌いになつた？」

心臓が止まるかと思った。

「んなわけねーだろ。」

「バカだよな。新一追いかけて勝手に木から落ちて足捻って大会にも出られなくて。しかも新一には避けられちゃうし」

ピアノを弾くのをやめて蘭がこちらへと視線を向ける。

「ごめんね…新一のせいなんかじゃないんだよ。たしかに大会に出れなくなって悔しかったけど自分のせいだもん。ドジしたのはあたし。新一が気に病むことなんて何も無い」

「でもオメー俺を助けようとして…」

「関係ないよ！！あたしが勝手にしたことだもん。新一に避けられるほうが余程痛いよ。離れていかないで」

蘭の瞳が揺れて涙を流した。

「…違う。オメーを助けられなかった自分が嫌なんだ…。何もできないでケガさせるだけなら近くにいないほうがいいと思って」

「いつも自信満々な新一が自信なくしてんだ」

うるせーよ。

2週間前から俺はボロボロだ。大好きな推理小説だって頭に入らない。

「じゃあ…ケガは新一のせいってことにして。責任…とって貰おうかな」

「…おう。」

なんでもこい。罵るだけ罵って。責め立てて貰ったほうが楽だ。

「足ね、もう少し安静にしたほうがいいんだって。完治するまで自転車で送り迎えしてくれる？」

蘭がにっこり笑う。

「新一は完治するまであたしの足ね」

「そんなこと…」

「決まりっ！！さっそく送って貰おうかな！！今日は自転車ないけど」

問答無用で押しきられた。そんなことで許されるのか？でも久々に蘭と会話をしたことで気持ちが悪く落ち着いた。結局俺は蘭がいないとただの弱っちい男だった。

「あ…」

「どーした？」

先に廊下を出た蘭がカバンを拾いあげた。

「なんで新一のカバンがここに？」

…園子のやつ、覗いてたな。

「…なんで久しぶりにピアノなんて弾いたんだよ。うちで弾くくらいしか機会なかったじゃねーか」

蘭の家にはピアノがない。だから昔はよくうちに来て母さんと弾いていた。最近は無沙汰だがそこそこの腕前は健在だった。

「だって新一、話しかけようとしてもダメだったから。ピアノで引き留めるしかないでしょ？」気づいて”ごめんね”って思いを込めて、窓を全開にして弾いたの。そしたら新一が来てくれた。よく分かったね、あたしが弾いてたの」

蘭は嬉しそうに微笑む。

わかるさ、蘭の弾きかたくらい。昔から聞いてたんだ。それに”私に気づいて”って少し悲しげな音もすぐに気づいた。

「こないだ作れなかったから今日はハンバーグにしようか。お父さんが帰り遅いから一緒に食べよう！…」

「その足で買い物もすんのかよ。待ってる、先生に学校の自転車借りてくつから!!」

そう言い残して職員室へと急ぐ。

蘭を送るために貸してくれと言ったら先生たちに

「仲直りしたのか、よかった」「一気に機嫌がよくなったな」等とからかわれた。

そんなに俺は機嫌が悪かったか？複雑な気分ではあったが嫌な気にはならなかった。

「らん」

音楽準備室から顔を出してスッキリした顔の親友に声をかけた。

「園子!!」

「よかったね、仲直りできて。」

自分でもにやけるのが分かる。

蘭も笑顔を向けた。

久々に見る笑顔に心から良かった、と安心した。

でも疑惑がひとつ。

「足……ほとんど治ってんでしょ？」

「バレた？新一、こうでもしないと一緒に帰ってくれないだろうし。それに……」

「それに？」

「責任つてカタチにしないとずっと気にするかと思って  
なるほどねー。」

ま、仲直りしてくれるならなんでもいいけど。

「邪魔にならないようにあたしはあたしで帰宅するわ。新一くん、  
自転車借りられたみたいよ。行きなよ！あんたらの夫婦ぶりを見  
ないとなーんかこっちも元気でないんだよね！！」

ウィンクしてみせると蘭は少し頬を染める。

「夫婦じゃないもん。でも園子、ありがとう」

蘭は微笑んで”慌てて包帯を巻いた左足”と共に新一くんの元へと  
向かう。

ま、ヤツのことだから左足が治ったことなんてお見通しなんだろう  
けど。仲直りのキツカケができて良かったんじゃないかな。

音楽室の窓から校庭を見ると蘭と新一くんが二人乗りで帰宅すると  
ころだった。

校庭にいたサッカー部がどうやら野次を飛ばしたらしく新一くんが  
何か言い返してる。

明日からはきつとまた仲良く登校しお揃いのお弁当を食べて帰宅す  
る。

「よかった」

久々に聞いた蘭のピアノは少し寂しげでも慰めるように優しかった。

新一くん言葉で伝えられなかった

”ごめんね””ありがとう”

伝わってよかったね。

音楽室の窓を閉めてあたしも帰宅した。

明日からまた見れるであろう親友の笑顔を思い浮かべながら。



## 2週間前の事件（後書き）

なんか当初と予定が…（汗）  
次回はもっと頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7840x/>

---

謝罪の言葉を風にのせて

2011年10月21日09時01分発行